令和７年度　研修員個人研究　研究要約（No. １）

長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究要約は以下のとおりです。

	氏名	研究主題及び 研究副主題	研究要約
教科・経営研修課	竹下 智之	数学的活動を通した数学的に考える資質・能力の育成 ～数学的活動における言語能力を働かせる指導の工夫を通して～	生徒が言語能力を働かせるように、１単位時間の中で授業者が指導を工夫したり働き掛けを行ったりすることによって、数学的に考える資質・能力の育成を図った研究である。中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月 21 日）において示された、『言語能力を構成する資質・能力が働く過程のイメージ』を基に、複数の授業をサンプルにして『言語能力を働かせる工夫アイデア集』を作成した。それを基に、検証授業における指導の工夫や働き掛けを考え、指導案を作成し、実践した。実践後の考察の結果、今回取り入れた工夫（ペアやグループでの意見交換）や働き掛け（考えの再構築や比較の促しなど）によって、生徒の数学的活動が充実し、数学的に考える資質・能力の向上につながるという、研究仮説の有効性を示すことができた。
	赤山 大地	中学校理科における科学的に探究するために必要な資質･能力の育成を目指した授業づくり ～見通しをもち科学的に探究するための働き掛けを通して～	本研究は、中学校理科において科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する授業づくりを目的とし、特に子供が見通しをもって学ぶための「教師の働き掛け」について検討したものである。具体的には、浮力を題材に、子供が「何が関係するか」「何を明らかにするか」「どのように調べるか」「どのような結果になるか」を考え、見通しをもつ授業を構想・実施した。授業中の「子供の姿」やアンケートの結果から構想した「教師の働き掛け」は、子供が科学的に探究するための資質・能力の育成につながると考える。 主体的・対話的で深い学びの実現に向け、子供の気付きを促し、思考をつなげるための「教師の働き掛け」について提案する。
	本岡 博満	自分の考えを形成し､適切に表現することができる生徒を育てる国語科の授業づくり ～「考えの形成」の過程における「対話的な学び」の視点からの授業改善を通して～	各種学力調査の結果から、本県生徒には表現の前段階である「考えの形成」に課題があることを推察した。また、自身の授業を振り返る中でも、何を書けばよいか分からず手が止まってしまう生徒の姿が思い起こされた。そこで本研究では、「考えの形成」の過程を明らかにし、「対話的な学び」の視点から国語科授業の改善を目指していくこととした。 まず、学習指導要領解説を基に「考えの形成」の過程を五つのステップに整理し、各段階で目指す生徒の姿と教師の支援・働き掛けを設定した。さらに、それらを踏まえて作成した「書くこと」領域の単元計画では、生徒が「自己との対話」と「他者との対話」を往還しながら自分の考えを形成し、適切な表現へと向かっていくプロセスを意図的に組み込んだ。 以上のことから、「自分の考えを形成し、適切に表現することができる生徒を育てる」ことにつながる、「対話的な学び」を充実させるための教師の支援・働き掛けの具体を明らかにした。
	久保 智美	生徒が主体的に音楽を楽しむ中学校音楽科授業の提案 ～読譜力を育む活動を通して～	本研究は、生徒が主体的に音楽を楽しむための一つのアプローチとして読譜力に焦点を当てた研究である。学習指導要領解説、各種調査等から、楽譜を根拠とし、自ら音楽を再現したり、音楽の構造を理解したりすることがより豊かな音楽の楽しさにつながるのではないかと考えた。 さらに、教師の読譜指導の実態把握を目的としたアンケート調査では、必要性を感じながらも指導方法や十分な指導時間の確保に課題を抱えている教師がいることが明らかになった。 これらを踏まえ、階名による視唱を中心に、短時間で継続的に取り組める読譜力育成のための活動を考案し、既知の楽曲や未知の楽曲を組み合わせ、系統的な年間活動計画を作成した。

※　詳しい内容をお知りになりたい方は、研修員個人研究報告書が玖島の杜図書館資料室（本館３階）にあります。また、Plant にて、２年目研修員の研究概要・報告書を公開していますので、是非御覧ください。

令和７年度　研修員個人研究　研究要約（No. ２）

長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究要約は以下のとおりです。

	氏名	研究主題及び 研究副主題	研究要約
教科・経営研修課	野口　香織	小学校算数科における自ら学びを進めていく児童の育成 ～児童の自己決定を促す学習を通して～	児童が自ら学びを進めていくための算数科の指導の在り方について研究を行った。 具体的には、児童が自ら学びを進めることができるような「自己決定」を促す学習について考え、自己決定を促すための四つの手立て「学びの目的を自覚する『単元ゴール』の設定」「よりよい選択をする『支援・価値付け』」「学びを見つめ直す『振り返りシート』」「思考を深める視点の提示」について検討した。 本研究を通して、自ら学びを進める児童の姿や自己決定をする学習の在り方を捉え直し、自己決定を促すための手立てを具体的に考えることができた。
	竹森　健斗	言葉に着目して、自分の考えをまとめることができる児童を育てる国語科の授業づくり ～「読むこと」の領域における「言葉による見方・考え方」を働かせるための意図的な指導を通して～	本研究は、言葉に着目して自分の考えをまとめる児童の育成を目指すものである。長崎県学力調査で「叙述を基に捉える力」に課題が見られたことや、自身の指導における曖昧な指示が児童の思考を妨げていた自省に基づき、本主題を設定した。 研究の実際として、学習指導要領や先行研究を参考に自身の「言葉による見方・考え方」を捉え直した。そして、研究の成果として「着目する言葉の参考例」や「考え方の具体」、「『言葉による見方・考え方』見える化シート」を作成し、児童が働かせる見方・考え方の具体を明らかにした。 さらに、それらの基礎研究を基に、児童が「言葉による見方・考え方」を働かせるための教師の指導の具体を整理した単元構想案を作成した。次年度は、今年度の研究を基に授業実践を行い、手立ての有効性を検証していく。
	長瀬　陽一	自分の意見を表明し、他者の意見を尊重する子供の育成を目指して ～子供の意見形成を促すファシリテーションおよび思考ツールの活用方法についての考察～	昨年度までの個人研究では、人権に関する「知的理解」と「人権感覚」の両面から系統的な学習を重ねることが、自他の人権を守る実践行動を育成するために有効であることを考察してきた。その際、体験的参加型学習等の教材活用の他、日常的な取組によって子供の意見表明の力を伸ばすことも重要であることを新たな課題として挙げていた。しかし、後者の意見表明の力を伸ばす取組の具体的な内容は示すことができなかった。そこで、本研究では子供の意見表明について考察するとともに、安心して思いを伝え合える環境づくりに有効な教師のファシリテーションスキルの向上、意見形成に有効な思考ツールの活用について考察を行った。 学校での実践においては、「ファシリテーター的教師」が意図的・計画的に思考ツールを活用することが、子供の意見表明の力を育成する上で有効であると考えた。
	山口　勝也	人権を守るための実践行動を育む人権教育の啓発と学習の在り方についての考察 ～自分の内にある差別性の意識化を目指した学習指導事例の提案を通して～	差別の問題を自己の課題として捉え、差別を許さない実践行動につなげる人権教育の充実が求められている。しかし、これまでの人権学習においては、差別事象を理解することや被差別の立場への共感にとどまり、学習者自身の生活や言動を問い直す学びに十分結び付いていないという課題が指摘されてきた。 そこで本研究では、「差別は差別する側の問題である」という認識に立ち、自分の内にある差別性を意識化する学習を通して、差別の問題を自己のこととして捉え、行動変容へとつなげる人権学習の在り方について考察した。まず、「差別は、差別する側の問題である」という認識を育てるための四つの視点に注目した。そして、人権の学びとして育てたい力を整理し、四つの具体的な学習指導事例を提案した。 研究を通して、差別を自分と切り離さずに捉え、生き方や日常の行動を見直す学習の有効性を示すことができた。

※　詳しい内容をお知りになりたい方は、研修員個人研究報告書が玖島の杜図書館資料室（本館３階）にあります。また、Plant にて、２年目研修員の研究概要・報告書を公開していますので、是非御覧ください。

令和７年度　研修員個人研究　研究要約（No. ３）

長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究要約は以下のとおりです。

	氏名	研究主題及び 研究副主題	研究要約
教育支援研修課	平山 拓也	必要な支援を求めながら自分の意思で行動できる生徒を育てるキャリア教育の充実を目指して ～「教え合いを重視した協働学習」において卒業後に必要な力の育成を図る～	長崎県教育委員会（2022,2024）によると、県内知的特別支援学校高等部の就職希望者の就職率は過去 10 年で平均約 92％である。一方、就労した卒業生が短期間で離職するケースもある。昨年度は卒業後の安定した社会参加に向けた「卒業後に必要な力」を整理し、そのうち筆者が勤務経験のある知的障害特別支援学校高等部の職業学科の「流通・サービス」で扱う力を「身に付けさせたい力」とし、育成を図るための協働学習をまとめた「活動集」を作成した。 証協力校職員が活動集を用いた授業の中で「教え合いを重視した協働学習」を行い、授業で見られた生徒の変化を三つの視点で整理し、教師の意識の変化や働き掛けとの関連から、必要な支援を求めながら自分の意思で行動できる生徒の育成について検証した。 実践検証を通して、活動集の活用による教師の意識の変化や新たな気付きが見られ、筆者は必要な支援を求めながら自分の意思で行動できる生徒の育成に向けた学習の在り方を捉え直した。
	井上 博数	非認知能力の向上を目指した指導方法の検討 ～GRIT 向上を目指したポートフォリオシート、コーチング・ハンドブックの活用を通して～	ＶＵＣＡ時代と称される現代社会において、生涯にわたる適応やウェルビーイングを支える能力として、認知能力に加え非認知能力の重要性が国内外で指摘されている。学習指導要領においてもその育成が求められているが、学校現場では具体的な指導方法が十分に体系化されているとは言い難く、取組の形骸化や教員の負担増といった課題が指摘されている。こうした背景を踏まえ、本研究では非認知能力の中でも長期的な目標達成に関わるＧＲＩＴ（やり抜く力）に着目し、生徒用ポートフォリオシートと教員用コーチング・ハンドブックを開発・活用した実践的検証を行った。その結果、目標設定や振り返りへの肯定的認識の高まりとともにグリット・スコアの向上が確認され、特に初期段階でＧＲＩＴが低い層において顕著な伸びがみられた。これは、目標の構造化と継続的な振り返りを基盤とする指導・支援が、生徒の持続的な努力を支える可能性を示唆するものである。本研究は学校現場における非認知能力育成のための指導・支援モデル、とりわけＧＲＩＴ向上モデルを、ＡＡＲ（Anticipation-Action-Reflection）サイクルを基盤とした循環的学習構造として整理し提示した。
	新里 香織	特別な支援を必要とする生徒が安心して学べる環境・授業づくりを目指して ～高等学校教職員に対する「特別支援教育の視点をもった取組につながる校内研修パッケージ」の作成～	文部科学省（2022）の調査では、高等学校の通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする生徒は 2.2％と報告されており、支援を必要とする生徒が通常学級に一定数いることが報告されている。また、国立特別支援教育総合研究所（2012）の調査では、特別支援教育ができるかという設問に対して、42.3％の教師が「現状では難しい」又は「できない」と回答していると示されている。筆者も高等学校で勤務する中で、学習面や生活面に困難がある生徒に対して、どのように支援を進めればよいか悩む場面が多かった。一方、特別支援学校での勤務を通し、生徒の特性や困りの背景を理解し、教職員同士で支援方法を共有し、共通理解を図る「特別支援教育の視点」の大切さを学んだ。 そこで本研究では、高等学校で実施されている校内研修に特別支援教育の視点を取り入れることで、教職員が自信をもって支援が必要な生徒が安心して学べる授業、環境づくりをできるようになってほしいと考えた。そのため、本研究では生徒の実態や教師の意識、研修ニーズを調査し、結果を基に研修内容を焦点化した「校内研修パッケージ試案」を作成した。今後は、試案を更に活用しやすいものへと改善し、実践を通してより多くの学校で活用できる形にしていきたいと考えている。
	水戸 雅人	自己の心の変化に気付き、表出・相談へとつなげる力を高める指導の工夫 ～保健体育科保健分野と学級活動の横断的な指導計画の作成を通して～	不登校の児童生徒数が急増する近年、生徒自身が早期にＳＯＳ（援助希求）を発信し、周囲の大人がその変化に気付いて支援につなげることが、未然防止の重要な鍵となっている。そのため学校現場では、生徒が自らの心の状態や変化を言語化して相談できる力の育成と、教職員が小さな変化を早期に把握できる仕組みづくりが一層求められている。そこで本研究では、不登校未然防止の視点から、生徒が自己の心の状態や変化に気付き、表出・相談へとつなげる力を高めるための指導を検討することにした。今年度は教員の手立てとして、保健体育科保健分野において生徒が心の健康に関する基礎的な知識を学び自己理解を深められるように指導するとともに、学級活動において生徒がＳＯＳを発信するためのスキルを育成できるようにする横断的な指導計画を作成した。さらに、１人１台端末を活用し、生徒の心の状態を日々可視化する「心の健康観察」システムを開発し、小さなＳＯＳの早期発見と迅速な対応を図る仕組みを構築した。今後はこれらの実践によって、相談行動への意識が高まるかを検証し、更なる実践の充実を目指していく。

※　詳しい内容をお知りになりたい方は、研修員個人研究報告書が玖島の杜図書館資料室（本館３階）にあります。また、Plant にて、２年目研修員の研究概要・報告書を公開していますので、是非御覧ください。